

BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No. 33
2007・10・5

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一



第7回 日韓中TV制作者フォーラム レセプション風景



ゲスト 女優 小林綾子さん



各国会場出席者たち

07年9月12日午後北京空港着。気温31度、晴れ時々薄曇り。日本側総勢37名。高速道路を一路バスで天津市の湾岸地区へ。夕刻会場の天津天保国際酒店（飲み屋ではない。一流ホテル名）に到着。夜、歓迎晩餐会の集い。



第7届 中日韩电视制作者论坛
第7回 日韩中TV制作者フォーラム
제7회 한중일방송프로듀서포럼
中国・天津 2007.9.12-16

は放送人の会、放送批評懇談会、放送番組センターなどの団体から有志が参加、志賀信夫（放懇理事長）大山勝美（放送人の会特別顧問）今野勉（同代表幹事）、山田良明（共同テレビ社長）などの祝辞があつて開催された。

翌13日、開幕式。日韓中テレビ制作者フォーラム常任委員長鄭秀雄氏の経過報告を皮切りに、主催国中国側から中国TV芸術家協会、天津市広播TV電影集団、中国文学芸術連合会、国際TV総公司、中国オリンピック委員会文化教育委員会、韓国からは韓国放送人会、韓国PD連合会、日本から

今回のメイン・テーマ。ドラマでは、「普通人たちの暮らしと精神を温かく取り上げる」、ドキュメンタリーは「自然環境を守り、社会環境を改善し、文化遺産を重視する」、エンターテインメントは「青少年と子供たちの美しい品性と創造力をもっと高める」と、北京オリンピックを見すえた主催国中国側は「オリンピック精神とTV制作者の責任」をサブテーマとして東京、ソウルと既に開催国の経験をもつ日本と韓国をふまえた意気込みが背景に強く感じられた。

参加作品。部門別各国2作品を上映。ドラマ部門では『鑑真東渡』『一人の女婿は半分の息子』（以上中国）、韓国からは『ありがとう』『お金の戦争』日本は『Drコトー診療所2006』（フジテレビジョン）『夫婦道』（TBS）を出品した。

ドキュメンタリー部門。『長江を再言する』『農夫と鴨』（以上中国）『テレビ随筆く故郷の人達』『シベリア虎三代の死亡』（以上韓国）日本は『もぎたてテレビ70 屋根付き橋の里』（南海放送）『コウノトリがよみがえる里』（NHK）を出品。エンターテインメント部門。『愛の彩衣』『2006グリム童話物語王大会決勝戦』（以上中国）『一緒に楽しむ』『私達の子供が変わった』（以上韓国）日本側は『いきいき！夢きりり、ボクラの島をドキュメント』（中国放送）『にほんごであそぼ』（NHK）。

なお、日韓中制作者フォーラムの実践課題である共同制作の成果を紹介する意味で特別参加2作品が披露された。『駆けぬけて今……岐路に立つ二つの団塊世代』（フジ）と『団塊世代〜一五〇〇万人の出發』（韓国）『新シルクロード』（NHK+中国スタッフ）。前者は敗戦、朝鮮戦争終結と時代差はあるが、共通した意識で生きる日韓団塊世代を入れこみ構成した。



挨拶 今野勉（日本側 放送人の会代表幹事）

総評
3カ国がそれぞれ作品を持ち寄り、上映しあい、制作者が意図を報告し討議し現場間が交流し、共同制作の気運を期待する催しも第7回目。かつては技術的にリードする日本、追いつき追い越せる韓国、そして学びの姿勢の中国であった。しかし、今や作りの技術面、着想や表現力の豊かさ、それらが全く対等のレベルで競いあっている印象をまずもった。

いくつか作品例で触れよう。大河ドラマ『鑑真東渡』は高僧鑑真が渡日するまでの苦難な道を弟子筋や日本の留学僧を通し鑑真像を彫琢する。いずれ唐招提寺など「日本編」がバトンタッチされ、作る局が現れたら面白い。また、『夫婦道』と『一人の女婿……』（天津電視台）にみるホームドラマへの共通する面白さ、ドキュメンタリー部門では生き物への描写力、物語性の是非など課題を持ちつつ、次回への期待につながる作品が目だった。娯楽部門でもスタジオを出た野外のテーマもまじり、『にほんごであそぼ』にみる伝統芸能を日本語感覚で捉え直す演出の斬新さが注目を浴びた。

結論。同じ漢語圏にありながら言語とパロール（会話）を共有しえないアジア的不幸にさいなまれながらも、若い中国側ボランティアの陽気さに救われ、小さな交流の芽があちこちで生まれた。中国側の温かいもてなしの心にあらためて感謝！の五日間だった。

構成 広報部

秘かなるメッセージ

放送人の会代表幹事 今野 勉

開会式から明けて二日目の冒頭に「主題報告」と称して、各国のテレビ状況を二十分ずつ報告することになっていた。

中国の報告者が北京オリンピックの準備状況を報告したのに続いて、私が日本のテレビ状況を、「いいニュースと悪いニュース」で報告した。

まず悪いニュースとして、生活情報番組の捏造事件を取り上げた。制作者の倫理が強く求められ、私たち制作者も反省するところがあったと述べたあと、しかし、と私は続けた。

しかし、ジャーナリズムの最大の使命は、真実の追究にある。その使命を果たすためには、時として常識的な倫理にとらわれていけない場合もある。制作者の倫理とジャーナリズムとの関係は、ひと筋縄ではいかない、という趣旨を、私は話した。

そのとき私は、原寿雄さんが「GALAC」八月号で述べていた「コンプライアンスがジャーナリズムを滅ぼす」を意識していた。

その趣旨を、捏造事件の報告に借りて述べることに、私は、実は秘かな意図を持っていた。さまざまな制約の中で奮闘している中国のジャーナリズムに共感と連帯のメッセージを送ること、である。

ソングジン
続いて登壇した韓国の宗日準さんは、

ES細胞捏造事件を暴露した番組「PD手帳」のプロデューサーである。

宗さんは、ES細胞捏造の真相を究明したときに、韓国の国民的英雄であった黄教授を貶めたとして視聴者から猛反撃を受けた経緯を説明し、それに屈せず真相を追究しつづけた結果、ジャーナリズムとして勝利したことを報告した。

宗さんはさらに、「PD手帳」が、いかに権力の圧力と闘ってきたかをさまざまな事例で説明した。宗さんもまた、私のように、秘かな意図があったのだらうと私は推測した。

その推測は当たっていたようだった。最終日のシンポジウムで発言を求められた宗さんは「それぞれの国にはそれぞれの事情があるでしょうから」と答えていた。宗さんが「それぞれの国の事情」を十分に意識していることがその答弁から解ったのである。

「主題報告」のあと、私は、ドキュメンタリー部門の審査員として、各国のドキュメンタリー番組を二日に渡って見続けた。宗さんも同じ部屋でドキュメンタリー番組を見続けていた。

番組担当者（PやD）と他の制作者の質疑応答は、三ヶ国の通訳が必要で時間がかかるうえに、通訳がしばしば質問や答弁の訳をまちがえるので、なかなか議論が噛み合わなかったのだが、宗さんは、日本に四年ほど来ていたことがあるとのことで、日本語を理解し、そのうえ中国語もできるので、しばしば通訳者の間違いを指摘したり、質問者と答弁者の発

言の意味を正確に伝え直したりして、八面六臂の活躍であった。

こうした行事で、すぐれた番組に出会うことも楽しみのひとつであるが、すぐれた制作者に出会えることもまた大きな楽しみのひとつであることを、実感した旅であった。

グローバルイズムとナショナリズム

放批懇理事長・大会顧問

志賀 信夫



来年の北京オリンピックはおそらく成功を収めるものと思われれます。それはグローバル時代が進行中の現時点の中で、グローバルに反応して、ナショナリズムが逆に盛んになり、各国とも新記録を生み出そうと、熱烈に競い合う傾向にあるからです。

では天津の三か国フォーラムではグローバル時代にどんな役割を果たさねばならないのか？グローバルイゼーションを強く意識して、世界中に通用する番組を制作する必要はあるものの、そればかり考え過ぎると、番組内容は誰にでも

わかるように平均化され、マニュアル化し、同一化され、つまらなくなりまます。グローバルイズムが反転し、民族主義が台頭しているように、それぞれの国や地域性を生かした特異な番組制作がまず望まれます。

更に大切なのは、ナショナリズム一辺倒ではなく、隣国との共生による多元主義文化の創造であり、漢字文化を共有した中・韓・日による象形文字文化の新たな再生をテレビ映像文化を通じて実現していくことでしょう。ローカリズムに閉じこめられず、多角的な視点から描く・対称をとらえ直し、多元・共生の視覚・映像文化を創り出す新時代だと想われます。

グローバルイズムの反転のナショナリズムではなく、グローバルイズムの再反転の東洋の原点への回帰であり、仏教やアジアの死生観をふくめた東アジア文化の再生・復活かと考えております。

合理主義、科学万能主義では考えられなかった多次元な文化に基づいた新しい映像文化がこれから生まれるでしょう。

中国の麗江には、トンパ文字と言われる象形文字がいまだに残って使われています。映像を使って、文字同様に人間の思考を表現する時代は近づいております。誰でもが、文字を使っていますが、どんな表現行為を行っておりますが、どんな人間でも映像を活用して、具象や心象を表現できる時代は間もなく到来するで

しょう。

フィルム中心の映画文化時代、ビデオ主体のテレビ文化時代の二者を比べてみて、はつきり異なってきたのは、映像がモニター・ジュユされる行為が、シーンのモニター・ジュユから画面そのもののモニター・ジュユに推移したことで、映像そのものの表現が多次元、多様になってきたことがよくわかります。

映像も言語のように、複雑・多様な表現にも利用できます。象形文字を作り上げたアジアの人たちの力で、グローバル時代の新しい映像文化を内容豊かなハイレベルなものにする試みに挑戦してみようではありませんか。

福岡大会の反面教師

放送人の会特別顧問 大山 勝美

天津滞在四日間、晴れることはなかった。雨もよいの曇天とは聞こえがいいが、北京から流れてくるスモッグのせいであつた。たしかに北京はオリンピック用施設の建設が急ピッチで、工事のほこりとスモッグの複合汚染で息苦しくなるほどであつた。

大会の様子は、今回参加された鈴木嘉一氏（読売新聞）が九月二十二日朝刊で触れているように、中国側番組の社会的問題への取り組み方に日韓との微妙なズレが感じられたのは事実である。プレ・オリンピック、天津テレビ開局四十五周年記念ということも重なって、鼻息

荒く意気込んでいたといえる。

「なんてつたつて中国」の意識みえみえで、これが中華思想、覇権主義かと思いたくなるような大仰な構えの大会であつた。日韓はコンセプトも取り組み方もズレやぶれはしていない。東アジア新時代に、テレビ制作者たちが膝つきあわせて本音で将来の「あるべき番組交流、共同制作の方向」をリアルに探ろうという基本姿勢である。

中国は主催が全国組織のテレビ芸術家協会、現場PDは勿論、脚本家、俳優、スタッフ、元CCTV局長までが会員に含まれていて、背後に党と国家が控えている。したがって、予算もドカンと用意されているという構図である。党や行政のトップが顔を出すオープニングセレモニーや歓迎宴、表彰式などは要人の挨拶が長々と続き、仕掛けは華やかで派手である。

肝心のフォーラムの内容はといえば、相不変の通訳のレベルの不揃い、会場説明、式次第通達の不徹底、地元PDの不参加が目立つなど、全体に準備不足、浮き足だった感は否めなかつた。表彰式のゲストプレゼンターにと特別参加した「おしん」の小林綾子さんの扱い方や参加番組の処理、セレモニーでの発言の人の選や順番がぎりぎりまで変更が続いたりの状態がつづいた。

どうも北京の芸術家協会側と現地天津テレビ局スタッフとの意思不統一が原因のようであつた。それに中国側の説明不足、日本側も早

のみこみ早合点の誤解もあつたりと解つてきた。こちらへんが国際大会の難しさ・厄介さである。すべては「来年の日本・福岡大会への反面教師」の役をつとめてくれているのだと、ぐっと我慢して、諸現象をうけとることにした。

何しろ中国とは一衣帯水の隣国が日韓である。問題含みの中国の存在感は東アジアだけでなく世界で大きくなることは確かである。この大国とどう折り合いをつけてフレンドリーにつきあうか。

私たちは日本人の対韓感情が「冬ソナ」「チャンギム」によつてガラッと変わった前例を持つている。テレビ番組を通じての友好・交流は想像以上に互いへの影響力はつよいのだ。ねばり強くあきらめずテレビ番組を通じての相互啓発、共同番組の開発をすすめる—そのため「日韓中テレビフォーラム」の果たすべき役割と期待は大きいといえよう。

来年の福岡大会は、村上雅通氏の言う通り、フェリー船上の真剣討論の「原点」にかえつて、シンブルで実質的な内容の濃い大会にすべき、との気持ちをもますます強くしているところである。

天津雑感

会員 河野 尚行

明の時代から首都に近い良港として発展した天津、日本人が設計をした新しい天津歴史博物館を見学する。

普段、この場で中国人民にどのような

説明を行っているのか、展示物を使って、次世代にどのような歴史認識を育んでいるかは不明だが、展示の内容を見る限りは、植民地時代、日中戦争時代とも、極めて客観的である。毛沢東が中華人民共和国の建国宣言をした天安門の巨大なジオラマ以外、プロパガンダの臭いはいない。周恩来、温家宝を育てた地としての郷土愛がほほえましくらいだ。

さて、私が担当した子供を対象にしたエンターテイメント部門の話を少々。中国の作品はグリム童話に素材を求めたミュージカルや、ちびっ子物まね選手権など、華やかな公開特集番組だ。芸達者な子供や、タレントへの演出力、舞台セットの金のかけ方、など尋常ではない。会場の親子、特に両親の満足そうな顔が印象に残る。

韓国は芸能人が一人つ子を、ペットを可愛がるように育て、しつぺ返しを食らうドキュメントを提出した。

描かれた状況は特殊のようだが、自分の事で、忙しい親たちが陥りやすい問題を提示している。普段は一般家庭のしつけを取り扱った番組で二年以上続き、放送回数は百回を超え、韓国新家庭での育児方法を模索しているという。

日・中・韓とも、世界の中でも異常なほどの少子化率である。子供に金をかければよい、というものではない。自分の自己実現が最大の関心事で、今の時代を精一杯、充実して生きる。そして次世代につけが残る。子育てと消費社会の環境問題は似たような課題をその根底に抱

えてまいいか。

最近日本で放送された番組の中で、三十代の独身女性が自己実現、自己表現の一つとして精子バンクを利用する話が紹介された。ネット社会が従来の家族観を揺さぶっている。時代と社会と人間と向き合うTV制作者たち、日・中・韓とも、少数数の子供を、どう遅く、しかも、協調性に富んだ人間に育てるか、私達は過去と未来から、共通の宿題を出されている。

福岡フォーラムへの序奏

会員 村上 雅通

十二年前、私は韓国の仁川からフェリーで天津に向かったことがある。確か十九時間程度の船旅だったが、様々な人間模様に出会った。

フェリーのあちこちに日本語の表示を見かけた。聞けば、数年前まで大阪と鹿児島を航行していたそうで、韓国の会社に払い下げられたものだった。パースーの韓国人は、以前、日本で働いた経験があつて日本語が堪能。彼の通訳で乗客と話した。

同室の韓国人男性は、中国東北地方に暮らす姉の見舞いに行くと言った。終戦後、瀋陽で生まれたこの男性は、戦後家族とともに朝鮮に引き上げたが姉は結婚したこともあつて留まった。姉と再会したのは、韓国で海外への渡航が自由化された後、別れ別れになつて四十年後の

ことだった。姉の生活ぶりは大変貧しかったと彼は涙を流した。二回目の再会は、姉との永遠の別れの旅でもあつた。

大部屋の客室には、大きな荷物を傍らに置いた三十歳代の女性に出会った。中国東北部の朝鮮族で、数年前韓国人男性と結婚してソウルで暮らしていた。中国の経済が活況を呈してきたため衣類の行商を始めたそうだ。わずか三人との出会いだつたが、日中韓の戦後の歴史を垣間見た思いだつた。

そのフェリーの到着地で開かれた今回のフォーラム。そんな歴史の断片に触れることが出来るのではないかという期待があつたが、残念ながら裏切られた。ただ、例年のことながら、制作者たちの熱い思いと執念は感じ取つた。

来年は福岡で開催される。福岡は古くから東アジアの玄関口だ。なんとか、その歴史を伝え、今後のあり方を投げかけるフォーラムにしたい。

国際間連絡あれこれ

会員 山田 尚

「作品の授賞式にゲストが欲しい、と中国が言っている」

鄭秀雄さんからのこんな話から始まつていた、今回の授賞式イベントの動き。

「小林綾子さんに決めました」

「いいですね、中国に連絡しておきましよう。おしんのテープは中国にある筈です」

それから結構時間が経つた八月中旬、「小林綾子さんに歌は歌つてもらえませんか」

「は？彼女は歌手ではありません、無茶です」

また少し日が経つて、

「歌手、誰か呼ばませんか」

「小林さんと別にですか？」

「そう、どうしても歌手が欲しいようです」

「小林さんの契約書まだ着きませんよ」

「送ると言っていたのに・・・」

契約書は結局送つてこず、中国でのことになった。

「歌手の件ですが、中国で準備したいといつてきました。全部を若い人で揃えた」とか

「日本側もフォーラムの授賞式にあらうような歌手を探したのですが」

「中国側は謝っています」

授賞式がどんな構成なのか、ずいぶん前から尋ねていたのだが、出発の数日前、やつと来た連絡が

「小林さん、おしんの衣装で出て欲しいと言つてるよ」

「おっとっと、おしんは十歳のころの子役ですよ」

「無理だよ」

「当然です。ただ、彼女は着物で登場しますから」

「ところで、おしんのDVD、中央電視台にあるのだが、借り出せないと云っている。日本から持ってきてくれますか」

そんなこんなのまま中国に。

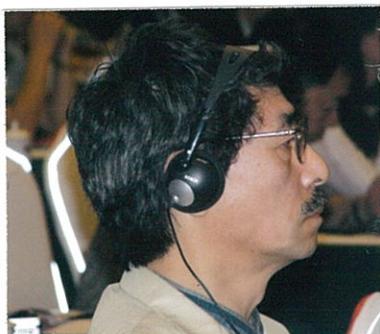
こと授賞式に関しては、天津TV娛樂班―天津TV国際部―在中國の鄭さんの助手―鄭さん―山田、の連絡の往復。授賞式の前々日、始めて渉外の担当Pと会う。だが内容についてはそこから現場のPDに連絡、何度ものやり取りの後ようやく本番の形が決められた。

で、その後も、受賞者もリハーサルに来てくれという事も含め、時間、やり方など二転三転。おしん役同様小林綾子さんは「がまん・耐える」の連続。ありがたいございました。

その結果が、授賞式歌番組でした。

現場は、歌番組のスタッフが担当し、彼らは、日本、韓国、オーストラリアの歌手たちを集めたネットの放送もやつて日本からのアクセスもあるらしい。そんな彼らの集大成だったのでしようか。場内で流した映像も含めの大頑張りでした・・・。

のようなことで、今回も会場でもとに見られた作品は一本だけ。いつか、他の事を気にせず、じっくり見てみたいものである。



ドキュメンタリー鑑賞

会員 寒河江 正

六作品のうち五本を観る。私の好みのベスト⑤は

- 1位 コウノトリよみがえる里(日本)
- 2位 屋根付き橋の里(日本)
- 3位 農夫と鶴(中国)
- 4位 長江を再現する(中国)
- 5位 シベリア虎三代の死亡(韓国)

理由、1位 絶滅種のコウノトリを人里に放つ試みと、日本の農業の将来を見据えて描いている。作者の現状を憂う想いが伝わる。 2位 どんな状況にあっても、明るく、大らかに生きることが大事ということがリポーターとの対話から伺える。「橋は私の人生のはじまり」後半、一人の主婦が橋との関連を強く語っていた。 3位 主役である農夫は一言も語らない。風格はある。字幕スピードでは、農夫が中学卒とあったが何か関連があるのか。音楽と映像、ナレーションから農夫とカルガモの激烈な闘争とは思えない。新しい映像詩だ。 4位 1983年撮影、今日まで何度か放送された作品を、来年の北京オリンピックを意識し編集している。国際観光の映像部門賞があればグランプリ間違いなしの作品と思った。 5位 6年の長期にわたって描いた作品。20台の無人カメラが虎の生態、動向を克明に捕らえている。密猟者と思われるロシア人が途中登場

するが、実際は森を監視する監視員で、制作者が尊敬する自然環境学者ということがわかった。字幕からは逆の印象を受け、私は制作者に質問した。

*

二〇〇七年九月十二日(水) 十二時三十分 北京空港到着。先陣A班十二名に緊張が走った。「安倍総辞任」のニュースである。

なぜ、どうして、次期総辞任は…。この一報のまま天津行きのバスに乗った。五つ星のホテルに衛星放送が受信できない。翌朝の早朝ニュースで昨日の辞任劇が報道されていたが、言葉がわからず、かろうじて慶応病院のマークで総理の体調不良を推測した。もつと詳細な情報が必要だ。

二日おいて、十五日の開会式に駆けつけて頂いた衆議院議員原田令嗣氏(大会諮問委員)、総辞任の情報不足を察してか、大きなバッグ一杯の新聞六紙(朝日、毎日、東京、産経、ゲンダイ、静岡新聞)を歓談中の私たちのテーブルにどつとせた。

その時である。七人の放送人ならぬ情報人の手が一斉に新聞を筆取った。その光景は昨日の韓国ドキュメンタリーで見た、虎が残した鹿の屍骸に群がる、ハゲタカの様子そのものだった。部屋に眼鏡を忘れた私は、この光景に見惚れていた。落ち着きを取り戻したメンバーの一人が、むさぼり読みふける周りの同僚を見て「情報飢餓だね…」とポツリと言った。



天津フォーラム雑感

会員 長沼 士朗

今回の天津大会は、来年にオリンピック北京大会を控えて、「オリンピック精神と制作者の責任」というのがフォーラム全体のテーマであった。そのためか、私にとって今回は、番組制作者の責任という問題について改めて考えさせられる大会となった。

今野代表幹事の「あるある大事典」の報告もそうであったが、この点でいちばん印象に残ったのは、韓国の宋MBC教養局副局長の「PD手帳」についての報告であった。

毎週放送されるこの番組では、2005年、ソウル大学獣医学部ファン教授のES細胞捏造事件を世界に先駆けて告発したが、それは、ファン教授を国民的英雄に仕立てようとする政治権力や世論との戦いでもあったという。

日増しに番組づくりは危うくなっているが、今後も不正や非理を告発することにより社会の健康性を回復させたいという宋副局長の発言は、マスメディアの役割の原点を思い出させてくれる感

動的な報告であった。

次に大会で感じた課題を二つ。

私は作品鑑賞で主にドラマを鑑賞したが、一つは日本語の翻訳スローの時間が短く、作品の理解が十分出来なかったこと。そしてもう一つは、今回もこれまでと同じように、制作者間同士の自由な話し合いの時間がほとんど持てなかったことである。

時間があれば、制作者の制作意図と視聴率の矛盾というような問題は、三国の制作者間でもつと議論を深めたい問題であった。

この制作者間の意見交流の場をいかに工夫して確保するかは、次回福岡大会の最大の課題のように思われる。

晴れないのはスモッグか疑心暗鬼か？

会員 荻野慶人

「盧溝橋事件70周年」「日中国交正常化35周年」「北京五輪1年前」の秋だ。

日中戦争勃発は僕が4歳の時で記憶はない。20年前の上海和平飯店のダンスホールでは初老のジャズメンたちがG・ミラーやB・グッドマンで自由を謳歌し、戦後の東京に似た親近感を覚えた。今回の催事場兼宿泊所となった天津天保国際ホテルは一流ホテルだが、朝昼夕のバイキングでは安心を落とすとして飲料水のキーンが辛い。国家薬監局長「ニセ薬に關し収賄と職務怠慢」処刑事件や、北京TV「段ボール肉まん」捏造報道が陰鬱

に浮かぶ。各所に英語表示はあるが日本語が見当たらず、武力侵攻の後ろめたい古傷が痛む。

12日夜のTV画面に安倍首相に続き慶応病院が映って胸が騒いだが、翌日原田令嗣さんの土産(新聞数紙)を皆で食り読むまで政変の経緯を知るに至らなかった。栄枯盛衰四千年の大国では、隣国の小事なのか…と又ひがむ。

僕はいつからか記録カメラマンだ。開会式の全景を撮る無人カメラ一台を三脚に据え、スイッチオンのまま時々サイズチェンジに立ち寄る。もう一台はハンディであちこちを自在に狙う。

司会がステージ左端で控えめに立つのは自然だが、鄭秀雄常任組織委員長に始まるVIPのスピーチが全て中央ではなく司会と同じ演卓で慌てた。儒教と社会主義の国では「高い処から」を遠慮するのか…。カメラを左側に移動するのは簡単だが、右寄りに着席した参加者には始終演説者の奥に舞台の袖が丸見えだ。カメラマンでなくても美意識を逆撫でされる。観客席を大事にする構成演出でないのに苛立った。

ヤラセ皆無のDVテープ80分16本で、僕は訪中を成田空港から再び始める。

下支えした若者たち

会員 鈴木 典之

春の予備会議で通訳陣の充実を(手薄だった楊州大会の例を挙げて)強く訴えた手



前、その時付き添ってもらった崔女史を通して、帰国後も電話で体制づくりの相談に乗ることにになりました。実現したのは、日本語は

天津外国語学院の教授・講師五人と大学院生十人のスタッフで、配置や心得でも当方の希望を受け入れてもらいました。ちなみに、全体会議は同時通訳四人、韓国語通訳は北京の中央民族大学からもベテランの応援を得ました。

大会運営の下支えは、この通訳陣と天津電視台国際部の若手スタッフたち(十五名程が二人三脚で勤めてくれたもので、日本代表団にとって一番役に立ってありがたかったのはこの若者たちの働きではないでしょうか。

出入りの激しい参加者個々の北京空港―天津会場間(高速道路で片道二時間半以上)などの送迎から、意思疎通の仲介、機能不全のホテルのフロントのサービス代行まで、どんな頼みにも快く応じてくれました。素直な好意と献身ぶりは「熱烈奉仕」そのもので、新鮮な驚きでした。具体的な場面での助言も求められ、殆ど全員と接触しましたが、素直さは興味と向上意欲の現れでもあり、小生には中国の若いインテリ層の頼もしさと映りました。

今回の大会を周年イベントに派手に利用した地元テレビ局にも、背に腹は代えられない悩みと思惑があったようで、その事情や心情は日本と大差ないように見受けました。大会が形式偏重に過ぎたのはお国柄も加わったことで、運営を仕切った電視芸術家協会の王主任も天津電視台の李主任も、表向き「大成功!」と誇りながら、内容面での日本側の活気付けの配慮と功を認め、打ち上げ会で感謝するのを忘れませんでした。

議論活性化のために

NHKエデュケーショナル 吉岡 民夫

東アジア、三方国の放送人が交流する場に初めて参加しました。二つの意見を記します。

一つ目は国家間確執へのセーフティーネットとしての期待です。三方国は何かと不安定な関係にあり、フォーラムに参加した放送人の絆は「いざ」という時に大いに機能すると想像しました。誤解の連鎖、無益な争いへの防御機能としての役割です。従って、フォーラムの目的の一つが冷静で事実拘る制作姿勢の練磨習得であることは、必然です。

二つ目は番組をめぐる議論のあり方です。番組視聴、意見交換…やはり問題は意見交換です。会場でも「忌憚のない批評」が奨励されました。しかし、参加者の存念が披露されたとはいえません。

議論活性化の一つの方法として次のよう

なことを現場で考えました。司会者によるテーマ設定です。散発的な個別意見に対し、司会者はそうした意見を集約して単純なテーマに再整理する仕掛けです。意見が吐き出し易い、お国柄が衝突する話題です。「自己主張と番組表現の限界」「映像モニタージュの巧拙」「時間軸と番組軸」「コメント表現の許容範囲」「企画採否の現状」「番組予算のメカニズム」…つまり、制作者が普段苦悩している技能や制作時の障害といったテーマです。

「中国」「中国」…

中国放送 平尾直政

中国に行く前から想像していた事ではあるが、最も質問を受けた内容は、「会社の名前の意味」だった。私の所属は中国放送。日本の「中国地方」の広島県の放送局であるが、交流でのネタとしては重宝した。

今回私が参加した番組は、エンターテイメント部門で『ボクらの島をドキュメント!』。入社以来ずっと報道畑に所属して、ニュースの現場で番組を作り続けてきた私にとって「エンターテイメント」のジャンルでのエントリーに少々戸惑いがあったことは確か。

参加者たちから「なんでこの番組がエンターテイメントなの?」という質問を受ける度に「なんででしょうね?」と苦笑いをするしかなかった。

今回のフォーラムのテーマは「オリン

ピックにおける放送人の責任と青少年の育成」。エンターテイメント部門のテーマは「青少年の育成・教育番組」とのこと。なるほど、そういうことなんだ……

しかし、「日本のおもしろいバラエティ番組をたくさん見たい」と思ってた来たのだが……という韓国代表のプロデューサーの話を聞いて、なんとも申し訳なくなつた。ごめんね、ボクで……

とはいえ、番組ジャンルや国籍は違えども「テレビ」という同じ世界に関わる仲間の話は、私にとつて、とても刺激的なモノだつた。

機会があつたら、また呼んでください。えっ？来年は福岡開催だから、自分から進んで手伝いに来るべき？
そ、そ、そうですね……

「屋根つき橋のある風景」

南海放送 寺尾 隆

1991年(平成3年)に毎週日曜放送のローカルレギュラー番組としてスタートした「もぎたてテレビ」。第735回「屋根つき橋のある風景・新緑の河辺を行こう」は、河辺地区に古くから残る「屋根つき橋」にまつわる地元の人たちの心温まるエピソードと美しい自然が織り成す物語です。そこには、沢山の出会いがありました。取り壊される橋を残したいと家の前に小さな橋として再建したお父さん、橋を渡つてお嫁入りした二人のお母さん……。屋根つき橋には、村人たちの想い、人生が詰まっています。日本の片隅のローカル番組が今回のよ

うな国際的な舞台に招待されたことは、誇りに思います。

スケジュールがタイト過ぎて、平場での交流がなかなか出来なかつたことは残念に思いますが、やはり、国を超えても、制作者のもの作りへの熱い想いは変わらないことを実感致しました。ローカル放送局の使命はいかに地域密着できるか、そして良質な放送ができるか、それは時代が変わっても不変のテーマだと思います。決して「世界」ありきではない、しかしそこから普遍的なものが必要見えてくる、そして伝えることが出来る、私は信じています。

都会の街中であつても、そこにはしっかりと生きていく「人」があり、「物語」があります。普通の人が輝く瞬間、そしてそこにある確かなドラマをこれからも描いてゆければと思います。

第七回天津大会に参加して

放送番組センター 笥 昌一

二十三年ぶりの中国訪問。その際もこの「テレビ制作者フォーラム」のお手本となつた「日中テレビ祭」(故・牛山純一氏の発案と運営)の仕事だった。現在の北京の空港は人で溢れ、海外へのフライト便が増えたこと、そして、天津へ向かう北京周辺の風景は、道路とビルの建設ラッシュ。考えてみれば、これは当たり前のこと。来年のオリンピックを控え、名実共に先進国の仲間入りを目指す中国。今回のテーマは、「オリンピック精

神とTV制作人の責任」。中国側の挨拶や発言も「放送界も五輪を目指し、そしてアメリカを超えるのだ」との意気込みを感じた。

参加番組は、韓国ほどのジャンルもテレビの持つエンターテインメント性を確実に大いに発揮した番組が並んだ。一方、中国は中央と地方、発展と残される人・課題などを感じさせる作品が目立つた。ドラマやドキュメンタリーの部屋では今野氏、松尾氏、鈴木典之氏の厳しくも温かい番組評の発言が印象に残った。これも成熟期に入ったフォーラム開催趣旨の姿かも知れない。

北京に一日残り、CCTVのアーカイブを視察した。「一般への番組公開の可能性は？」との私の質問に、「今は難しい。でもその環境が整い時期が来れば……」との館長の回答だった。

経済発展の次に来る「開かれた国づくりの将来像は？」を痛感した今回の中国行きだった。

日韓中視聴態度比較

日大芸術学部・准教授 中町 綾子

テレビドラマはそれが制作される国の枠組みをこえてアジア圏で広く共有される文化である。この夏、そんな想いから韓国、中国、台湾を巡る研究旅行を計画した。その折、フォーラムへの参加を声をかけていただいた。

国際フォーラムらしい華やかな開幕

式にまず圧倒された。しかし、始まってみれば共に互いの国の番組を見る、意見を交換する地道(?)な内容……。それがよかつた。

どこで笑うのか。そんなことが実はとても得がたい発見となつた。中国のホームドラマ「婿は息子の半分」(天津放送)では、タクシー運転手の婿と工芸店を営む妻が仕事を交換して、それぞれが散々な目に会う。その滑稽さが笑いにつながつた。韓国のアクションドラマ「銭戦争」(SBS)は借金を背負う男のドラマだが、取り立て屋など脇役のユニークなキャラクターに笑いがあつた。日本のホームドラマ「夫婦道」(TBS)は？一家の父(武田鉄矢)と、行き遅れ(差別用語)だったらゴメンナサイの長女(山崎静代)の素朴さが笑いを生んだ。

笑いについて意見交換する時間的余裕はなかつたが、私なりの各国比較のひとつの成果が得られた。ちなみに「夫婦道」上映中は笑いが絶えず、視聴後は各国制作者の質問が相次いだ。

また、インタバルに「銭戦争」のPDと話す機会を得た。彼が韓国では「D.T.コトー診療所」(フジテレビ)のようなシリアスなドラマを作るのは難しいと語つたのも興味深かつた。

今回、初参加させていだいたが、もうすでに、次回も……となんだか落ち着かない。それほどにアジア圏のテレビドラマは互いに互いを強く意識せざるを得ない今日である。

中国のヒップホップ

読売新聞 鈴木嘉一

「日韓中の参加者代表によるカラオケ大会らしい」。日韓中テレビ制作者フォーラム最終日の九月十五日夜の日程は、「授賞式兼中日韓歌会」となっていた。会場となる天津の劇場に向かう前、日本の参加者からこう聞かされた。

会場でプログラムを読み、これは勘違いと知った。しかし、歌の合間にフォーラム上映作の表彰式をささむショーアップに対し、「放送人の会」の会員たちが「フォーラムの趣旨から外れている」と口をそろえるのもつとむだ。

とはいえ、中日韓の若い歌手九組が出演した天津テレビ主催の「歌会」自体は、実に興味深かった。まず、中国の「T・H・P」というグループのヒップホップ（アフリカ系アメリカ人の音楽）に驚かされた。初めて名前を聞く日本のKenjiたちを含め、いずれもアップテンポで、ダンスを組み合わせた曲が主流だった。安室奈美恵や倅田来未あたりを連想すればいい。

正直に言えば、歌の内容は日本語でも聞き取れず、韓国語か中国語かもよくわからなかった。「今は、曲があっても詞がない時代」という阿久悠の言葉を思い浮かべながらも、東アジアの若者の間では民族や言葉の壁を超えて、「Jポップ」や「K（韓国）ポップ」と呼ばれる現代的なポップスが浸透している現実を目の当たりにした。

特に興味深かったのは、韓国を活動拠点

とする日韓の女性グループ「CATS」だった。四人のうち、ソロでも登場した大鶴綾香は日本人とわかったが、激しく踊りながら歌う様子から国籍は全く見分けがつかない。司会者の一人で、日本語と韓国語、中国語をよどみなく話した金孝妍という若い女性にも感心させられた。笑顔が魅力的な美人。中国人の通訳によると、今は韓国に住んでいる在日三世のようだ。大衆文化に国境はない。日韓中に吹いている新しい風を改めて感じた。

“放送の緊迫”を語り合う

小さな会 第3回
—原寿雄さんを囲んで—

現在の放送番組と放送局の姿、それらを支える放送業界と政府・総務省のあり様は、“あるある事件”の有る無しにかかわらず、複雑骨折をしたケガ人に似て、手の付けどころも見えなくなった。ながく放送ワオッチャーをやってきて、やむにやまれず「放送の緊迫」を語り合う“小さな集い”を呼び掛けた。“小さな”もよかつたのかも知れない。三三五五、みなが足を運んでくれ、今度の三回目は一七人。NHKE TV番組の改ざん問題で苦悩された企画制作者の坂上香さんを囲んだ第一回目が十五人。民放連人権BPOの基礎づくり尽力した渡辺眞治弁護士を囲んだ第二回が十五人と、お借りしたテレビマンユニオンの会

議室が人肌型のスペースだったことも幸いし、場内のホットな膝詰め感が得られ、今度で少し定着したようだ。

実は戦後つづいた放送の戦後レジームなるものの根底に矢を射る、いまこそ機会と見て、各見識者から多角の光を照射したい気が私にはあるのだ。

そろりと始めたこの“小さな囲む会”も九月八日（土）で三回目を終えた。話しに来て下さる人に恵まれ、今回も元共同通信社長編集主幹原寿雄氏の快諾を得た。知られるように、原氏は民放連の「放送と青少年委員会」委員長他をながくやられ、岩波新書「ジャーナリズムの思想」は十二刷に及ぶ。放送界浄化と再建に必須の方である。テーマを「放送の公共性」と設定し、意外に設定されないこのテーマでら今の放送状況を揺さぶ

り、ゴツタ煮的論議の場を造りだしたかった。原氏のレジメづくりは底深いものがあり、何度もファックスで示唆や指摘を得た。結果ついた着地点が「放送がやってはならぬこと」「やらねばならぬこと」だった。しかし、これは導線にすぎず、氏の箴言の宝庫から泉が湧き出で、われらの琴線が大いに触発されれば至福だと思つた。氏は一九八〇年代、電波ニューメディア担当役員として放送と関わりを持った頃から追憶し、“国家的公共性”から入り、自主規制、攻めのジャーナリズム、事件報道、娯楽番組の政治批判、権力監視、青少年、放送の自由と資本主義、情報公開、集中排除、視聴者はパートナー、放送人の自律、BPO

問題へと論を進め、その深さと広さはかつてみない味わいの弁論だった。

「わくわくする公共性」「小林よしのりと国家」「国家でない公共とは」から「われわれと国家の間には社会というものがある」と戦後民主主義のあり様をみごとに喝破された。そこに「国家的公共性」と「市民的公共性」の像が浮かび上がった。途中から参加者全員が発言参加し、ながい全三時間半を止揚していったように思う。

今回の集いには、元NHKの千葉勉、泉放送の平野丈夫、番組センターの山田悠紀雄、元民放労連の岸田功など各氏のほかに、各局とマスコミが少し加わり、当会の荻野、各務、藤久ミネ、吉永春子の各氏など異才の顔ぶれとなった。対話も豊穡だったように思う。特に旧テレビ朝日備前島文夫氏の、一九七二年のテレビへの同氏の提言と、現在の放送状況を共通項で結んでの発言は強く情熱に満ちたものだった。（記・石井清司）

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

予告

「名作の舞台裏 in 札幌」

放送番組センター・放送人の会 共催
連続ドラマ「池中玄太 80キロ」

司会 石橋冠
ゲスト 西田敏行 杉田かおる
坂口良子

▼日時・会場・宿泊先などのご案内は
決定次第お知らせします。

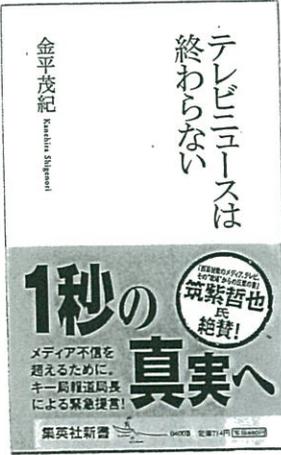
新刊書 紹介

テレビニュースは終わらない

金平茂紀著 (集英社新書)

ベトナム戦争批判でピューリッツァー賞を得たNYタイムズ記者D・ハルバースタムは生前、日本の記者から「ジャーナリズムの重要な機能とは何か?」と問われたとき即座に「アジェンダ・セッティング」を挙げたという。あえて意識するならば、殺到するニュースの海の中から何を問題とし、その奥底に秘められた本質に迫る態度の有無だろうか。本書でも紹介されているエピソードだが、そうした観点から9・11以後のアメリカ・ジャーナリズムの变化と変節にまず触れ、エンタメ色でニュースの強弱を押し込めるような日本のテレビジャーナリズムの肥大化した現状と再生を、サッカーのいわば司令塔の立ち位置から説く。メディア学者の分析や評論家の気ままな論点整理の書ではない。テレビ批判の砲火をかくくぐる知的従軍記である。

680円 (M)



テレビの時間

大山勝美著 (鳥影社)

作品中心のドラマ史、ドラマ批評、ドラマ方法論の類書は多いが、本書は長く自ら幾多の作品を創造してきた現場人のテレビ体験から諸々の仮説を抽出し、テレビ世界そのものの仕組みに内在するもの作りの姿勢や精神を説き明かす構成をとる。

前半を「テレビ業界編」。テレビ局内部からドラマが出来るまでの全過程を制作論としてまとめ、後半を「人物論」として豊富な交流の中から俳優や役者、タレント、作家たちを制作現場の「立ち位置」から説き明かす全480ページの大作である。放送専門誌や新聞、パンフレット、講義メモとして発表された論文を集約したものが、既成の論文を単に再構成した書ではない。短い論文が互いに連鎖しあい、放送現場の制作過程を光源にして集まった事象が同時代史にもなっている。放送現場にいる若い人たちが自分たちの位置を測る意味で、また放送メディアを志す次世代の若者たちに必読の実践書として薦めたい。(2800円)



(M)

INTERBEE・2007

パネルディスカッション

「放送ビジネスの未来展望」

「コンテンツいまアジアで」

何が起きているのか?

日時・十一月二十日(火)

午後三時~五時半

場所・幕張メッセ国際会議場2F

国際会議室

パネリスト

井上隆史氏 (㈱アジア・コンテンツ)

ツ・センター取締役

* ファインドゥコンテンツを自ら創り流通の主導も握る

徐迪曼氏 上海文広新聞傳媒集團

駐日首席代表、(株)STV-Japan

代表取締役社長

* コンテンツフェスティバルからアジアネットへ

大山勝美氏 放送人の会特別顧問、

(株)カズモ代表取締役社長

* 今、これから、私が創りたい「放送コンテンツ」

司会

今野勉氏 放送人の会代表幹事、

(株)テレビマンユニオン副会長

☆ お断り

連載コラム『鶴沼海岸から』は今回は川口幹夫さんから「たいしたことではありませんが腰痛もだいたく」

掲載いたしますとのことでした。

◆ 新会員紹介 ◆

堂本暎子 (千葉県知事 元TBS)

小河原正巳 (十文字学園大学講師)

遠藤雅充 (毎日テレビ企画制作部長)

三宅恭次 (元中国放送)

07 地方の時代

映像祭 in 大阪

今年は、大阪で第27回「地方の時代」映像祭を開催します(関西大学、日本放送協会、日本民間放送連盟 共催)

会場 大阪府吹田市 関西大学構内

社会学部(第3学舎)

開催日時

12月1日(土) 贈賞式

シンポジウム レセプション

12月2日(日) 受賞作品上映

ワークショップ

12月3日(月)~8日(土) 同右

審査員 森達也 森まゆみほか

「地方の時代」映像祭実行委員会

河田悌一(関西大学学長)

原田豊彦(NHK専務理事)

玉川壽夫(民放連専務理事)

プロデューサー 村木良彦

実行委員会事務局

06-6363-3874

Eメール info@regionalism.jp

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

第三回放送人句会

◇平成十九年七月十七日(火) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、大山勝美、今野勉、新村もとを、橋本きよし、堀川とんこう、松尾馬笑、西川阿舟

◇不在投句：中村フミ

◇兼題：髪洗ふ、虹、胡瓜、自由題

大漁や一番風呂に髪洗ふ もとを(◎視◎勝◎馬)

水撒けば水を追ひかけ虹立ちぬ フミ(◎勉◎視◎勝◎も◎き)

虹消えて海また少し波立てり フミ(◎も◎き◎と◎舟)

ガス室も見きアウシユヱイツ髪洗う 勉(◎き◎と◎舟)

月光に枯れあぢさゐのすこみをり 勝美(◎と◎勉◎き)

忸怩たる顔そのままに胡瓜揉み きよし(◎舟)

虹を見るデッキチェアに伸びて見る もとを(視)

酔の微香若き母の手きゅうりもみ 勉(視◎き)

曲りたる胡瓜に主張ありにけり フミ(視◎勝◎勉◎も◎き◎馬)

深水の筆やわらかき「髪洗ふ」 馬笑(視◎舟)

昔はね胡瓜に味噌でおやつなの フミ(視)

ゲンマンが真顔胡瓜の匂う指 とんこう(勝◎き)

倫を説く君に訣れの髪洗ふ 馬笑(勝◎舟)

恋ならば渡りても来よ虹の橋 とんこう(勝◎馬)

戦火熄みうつろいの日々胡瓜食む 馬笑(勉)

馬にする曲り胡瓜の見付からず もとを(勉◎と)

古里の湯殿に恥じる洗い髪 とんこう(勉◎馬)

洗ひ髪我が身いとしき午前二時 フミ(勉◎も◎舟)

虹立つや背後に広きオホーツク きよし(も)

夕虹や堂塔伽藍朱色寂び きよし(も)

上げ潮となりし運河に虹かかる きよし(も◎と◎馬)

滝の音聞ゆる空に虹のあり 視郎(と)

虹立つや少年の頬赫く燃え

髪洗う酒と煙草の匂いして

髪洗う今日と明日の句読点

虹の根に歩き出したる日もありき

コンテスト予選かず髪洗う

裏庭から取り来てさつと胡瓜もみ

髪洗ふ夫婦らぬ夜なれども

馬笑(と)

視郎(馬)

フミ(馬)

勉(舟)

勝美(舟)

阿舟

阿舟

第四回放送人句会

◇平成十九年九月二十五日(火) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、大山勝美、鶴橋康夫、中村フミ、新村もとを、橋本きよし、松尾馬笑、西川阿舟

◇兼題：月一切、秋刀魚、野分、台風

砕氷に目を覗かせて秋刀魚箱 きよし(◎視◎勝)

秋刀魚焼く別れ話は明日のこと フミ(◎勝◎馬◎舟)

家出せし子の好物のさんま焼く 勝美(◎康◎舟)

月明りボンボン時計の鳴り出しぬ 康夫(◎フ◎も)

一すじの風が伝えるさんま焼き 勝美(◎き)

野分めく風卒塔婆をかき鳴らし 勝美(◎馬◎フ)

那須高原白一色に野分過ぐ 視郎(◎舟)

酒所望秋刀魚の腸の苦ければ 阿舟(視◎康◎も)

胎蔵界朱泥の月を秘めて聞 きよし(視◎馬◎舟)

秋刀魚売る灯に銀色を撥ねかえず きよし(視)

台風や妙に燥いで大二匹 もとを(視◎康◎フ◎き◎馬)

月の夜は飽かず鎌研ぐ姑かな もとを(視◎勝◎き◎馬◎舟)

秋刀魚売る露西語新聞包み紙 きよし(視◎勝◎康◎馬)

風立ちぬル・ヴァン・ス・レーヴ口ずさみ 馬笑(勝)

満月に屈めば己が影の中 康夫(勝◎フ◎き◎舟)

父を捨て母と子にある良夜かな 視郎(勝◎フ◎)

おれ大根わたしはレモンさんま食う 視郎(康)

終電をやり過ぎしての月光り フミ(康◎も◎馬)

秋刀魚焼く火が零れ落ち土間昏し きよし(康◎も)

さようなら野分も君もさようなら 視郎(フ)

銭湯を出でて秋刀魚を焼く匂ひ もとを(フ)

月天心海賊船を照らしけり 視郎(も)

背骨より頭蓋を抜けて月上る もとを(き)

舌絡み背中冷えゆく月ひとつ 康夫(き)

手水鉢手許迷うて無月かな 馬笑(き)

父見舞ふ丸くおおきな月の出づ フミ(馬)

秋刀魚食みほろ苦き世や喜寿の膳 馬笑(舟)

十五夜に思い思いの靴の音 康夫

影二つ小指からめて後の月 馬笑

高層のビル壁のぼる今日の月 阿舟

ジェーン・キティかつて台風は美女なりし 阿舟

吹き飛ばす塵また寄せる野分かな 双閑

【注】作者名の下()の中は選者名。

視||視郎、勝||勝美、勉||勉、も||もとを、き||きよし、とん||とんこう、馬||馬笑、舟||阿舟、フ||フミ、康||康夫、なお「双閑」は中澤忠正氏の俳号

次回放送人句会

◇十一月十三日(火)午後六時半〜(七時締切)

◇於：麦屋(FAX03-3586-0056)

◇兼題：落葉、湯豆腐、テレビ(放送)

07 猛暑、便り二つ……

この夏、二人の会員の仕事が注目を集めました。一つは小中陽太郎がNHK時代の幻しの作品『しょうちゅうとゴム』の上映会（7月8日 内幸町ホール）。今一つは話題を呼んだ鶴橋康夫の『天国と地獄』。編集があがった折り、便りがきました……（要約構成 松尾）

挨拶 幻のドラマ上映会によせて

小中陽太郎

今夜はお忙しいところこんな沢山の方においでいただき誠にありがとうございます。ごさいます。いつの日かこの作品を見ていただきたいという夢がやっとかないました◆1962年当時、わたしはNHK名古屋のテレビディレクターでした。狭いスタジオに飽き足りず生の現実を、と前年「何でも見てやろう」を発表した小田実（夜行列車で名古屋駅の階段を降りて来たよれよれのレインコート姿の小田を昨日のように覚えています）を起用◆作品は石油コンビナートの四日市の工場を舞台に、取り残された農民や零細企業を題材に、芦屋雁之助、山田昌でコミカルなドキュメンタリータッチで描く、映像的にはアントニオ・ニとウエストサイド・ストーリーのパロディーです◆音楽は丸谷才一の紹介で高橋悠治。演奏は一柳慧と林光でした◆なぜこのテープが残ったか。当時ビデオ装置はまだ名古屋にはありません。わたしは四日市の岡の上に野球中継用中継車を持ち込み、そこでダンスシーンを撮影し、名古屋のTV塔へ送り、そこからマイクロ回線

で東京へ。そこでVTRにとつてもらいました。本番放送時に和田勉がキネコにしてくれましたが、資料室に戻したものの、後に廃棄処分されるころ幸運だったのは和田さんがそれを名古屋まで送ってくれたのです◆（中略）現代、時代はめぐり、イラク戦争、格差社会、政治の混迷は、ベトナム戦争初期を思わせます。小田も闘病が伝えられたので（注 直後永眠）高橋悠治にキネコの復活を相談、彼は「うん、まるごと上映しよう、《演奏つき》で」と乗った。このところ、NHKの「問われる戦時性暴力」事件の当局への過度の忖度、民放の「納豆データ捏造」事件と、その根底には放送局や放送人が記録の永続性を信じない姿勢が見えがくれています◆しかし映像も音響も消えない。これを見た「笑っていいとも」の若いプロデューサーが「よし、長生きするぞ」と。同時代人に向け上演の手紙を書き続けてふと気づいた。多くの人が病床にある。手紙は自然に若い次世代人にあてていました。テレビも平和運動もそうやって手渡ししていくしかないでしょう。

◆ナチスに終われ三三年にパリに亡命後に自殺した哲学者ヴァルター・ベンヤミンは、複製技術は民衆に芸術を分かち与えるが、モノリザのようなアウラは消える、と唱えました（「複製技術の時代における芸術作品」（三六年）しかしそんなことはありません。音楽も映像も市民運動も永遠です。この作品はわたしのモノリザです。

小田に捧げます。

（07年7月8日）

『天国と地獄』撮りから

地獄の編集へ

鶴橋康夫

ひたむきが渦巻く小樽にムクゲ咲き
緩むのは薔薇の花弁に帯の紐

◆「えっ！黒澤作品！勘弁してくださいよ！俺、『七人の侍』を観たのが中学生、『どん底』が高校生で、『用心棒』『椿三十郎』が大学の時、『天国と地獄』は社会人になってからで、そりゃもう敬愛というか（絶句）……あれって一筋縄ではいきませんよ。着想の妙、日常を描きながら異界を垣間見る跳躍、なんてったって哲学、思想の映画なんだから」とうろたえながら、亡弟のかけがえのない友達だったテレ朝・早川洋専務（現副社長）の命令に逆らえるはずがないと、平常心をかき集めてニッコリ笑ったのが二年半前でした。『愛の流刑地』の完成まで、じっと待ってくれたテレ朝の皆さんに感謝です。

◆一つの作品を通過することは、善光寺の「戒壇めぐり」のようなものです。真つ暗の回廊に足を踏み出した途端、自分の身体を見失います。必死に身体の平衡を保ち、恐怖と闘い、闇に蠢く魑魅魍魎を手なづけながら、一步一步前に進むと、突然出口に光が見えるのです。まさに光明の一筋です。想像もしなかつた安堵に包まれます。

編集を終えて先が見えて、今やっつ、安堵の一瞬です。

◆尻のほてり（情の昂ぶり）よりも、歯の痛みが辛い時があります。小樽ではパーボンで痛みを焼いていたのですが、ついに、わが家の「編集室」で失神です。歯科医に駆け込みます。五時間の手術です。何が何だか分からないまま、第一次治療の終了です。激痛から解放され、犬用の乳母車を買に行きます。老犬コロが神経性の骨髄炎とかで歩行困難になっていたのです。それに乗せ太陽が西に沈む頃、近くの丘でコロと夕涼みをしようと思えます。

炎天は鶴の形に息を吐く
晩夏光力一杯昼寝する

呆気ない別れ方をしたスタッフ・キャストの顔が浮かびます。歯の痛みはともかく、ダビングされた撮影テープが普段の半分もない。体内時計の秒針が「短い！」と叫んでいる。不安だけが渦巻いて、逃げるようにして帰宅した撮り日。鉛筆の先端のような三階の編集室に駆け込みます。

夏落ち葉天に帆かけて駆け上げられ
引くドアを押してみたよな蒼い空

右に多摩川、左に多摩墓地の緑が見える借景はともかく、この部屋で何日も過ごさなければならぬ、と暗澹たる気持ちになります。

◆寂しくなるほどの明るい空です。酷暑なにするものぞ、自転車漕いで大國魂神社に行ってきます。ともかくにも無事であることの報告に。

構成 久野浩平

今回は民放初期、混沌の中から現在に続く放送の形を模索し、開拓した方々の「証言」でまとめました。

まず 高橋啓さん。英語に堪能な高橋さんは海軍士官として江田島の兵学校教官、終戦時は占領に来航する米艦隊を鹿児島や佐世保に誘導するなどの任務を経て復員。一九四六年からCIEラジオ課に勤務、フランク馬場さんと出会います。米軍はNHKに新しい放送技術を指導、高橋さんも翻訳者、番組担当者として「真相はこうだ」

「二十の扉」「街頭録音」など数々の番組に関わります。民放が生まれ、五十一年文化放送の設立に参加、しかし意見が合わず二週間で退社。「まじめに試験を受けて」ラジオ東京（現TBS）に入社、開局に当たっては週三本本の番組を作りました。労働組合の創立と委員長就任の経緯に触れ、五四年テレビ開局準備のため二カ月間CBSで技術研修と「証言」は続きますが、早朝のワシントンでニクソン副大統領の日本国民への年頭挨拶を単独取材で録音した体験談には驚かされます。後テレビ開局記念バラエティー番組中継をはじめ数々の番組を制作、演出部長を勤めますが、「テレビ制作者は四五歳でサラリーマンを辞めるべきだ」という持説に従って退職、まことに波瀾に満ちた放送人生です。

「あれは何年だったか、日本で初めてのゼネストってのは。明日決行の前日、マッカーサーの命令でキャンセルになった。その時のね、マッカーサー

の原稿をね、臨時ニュースで流すから直ちに訳せと、五人ぐらい呼ばれて手分けして訳したんですけどね、その時はMPがまわりに来てね（中略）あの時が一番すごかったのじゃないか」

次ぎは 津川啓さんです。「ガキの頃から」映画好き、学生時代から映画評論に関わっていた津川さんは戦争が始まると召集除隊と雑誌編集の仕事を交互に繰り返しました。終戦後、出版不況から大仏次郎さんの紹介でラジオ東京に入社、編成部に所属、五五年テレビ開局では演出部映画課で米岡テレビ映画の買い付けを担当。「証言」では当時のフキカ作業の苦労話や活躍したラジオ東京劇団の人たちの思い出、大蔵省のドル割り当ての貧弱さなどについて語ります。「ベン・ケーシー」「サンセット77」「コンパット」など質的に高い作品が視聴率のベストテンを占めました。日本の本編映画の買い付けも始まり、各映画会社の全作品を毎日観るといふ津川さんにとって至福の日々が続きます。

「まともな番組はどこかで残しておいて貰いたい。それが視聴率は悪いからとか、こういうものは読まないっていうんじゃない、ベストセラーばかりじゃなくてね。まともな物がどこかで少しずつ残ってもらえると有り難いなあ、という気はしますけどね」

太田泰子さんも「銀の鈴」編集など出版界で働いたあと、五二年ラジオ東京入社。制作部で原稿取りの仕事からはじめました。芦原邦子さんの音楽番組、朗読による「名作物語」など担当、五五年テレビ開局で自ら希望してテレビ演出部に移動、フィルム取材の「東京近郊めぐり」「ひとみちゃん

のお菓子食べ歩き」などを制作、その後料理、婦人番組を担当。六三年番組宣伝部に移動、制作現場を離れた期間を利用して子供を生むことにします。

「証言」では当時の働く女性にとって仕事と出産を両立させる困難と満足感が語られます。次子の成長を待って朝ワイド「モーニングジャンボ」で現場復帰、「奥様8時半です」の枠を開拓して婦人層の共感を得ました。

「最初『モーニングジャンボ』で皆さんと相談して企画をたてたときに、男の人が出す企画では例えば、大根足を細くする方法ってのはどうだ、こうよ。男って女性向きのことは無理じゃないかって……」

次ぎは 吉川史博さん。五三年ラジオ九州（現RKB毎日）入社。経理部からテレビ開局を前に五七年編成部に移動、主にネットワーク関連の業務を担当。当時TBS系列の基幹五社（TBS、HBC、CBC、ABC、RKB）による五社連盟があり、ネットワークの様々な問題を討議、新しい編成方針を決定する五社常任委員会が設けられますが、吉川さんは最年少の委員でした。東京キー局とローカル局のせめぎ合い、ネット分担金の発案、NTV後楽園封じ込め作戦、東芝日曜劇場の五社共同制作など「証言」は生臭い具体的問題に触れます。一時間番組が何故五十六分になったのか、ヘッドラインニュースの編成、外部プロダクションの設立など現在につながる様々な改革、「ニュースコープ」開始時の裏話など、編成ポリシーにかかわる珍しい話題が続きます。

「報道部門を無視し、民放は商売だけだ、というわけにはいかないのではないか。そういう意識が強かったのはラジオをベースにスタートした局の気負いがあったからだ（中略）少なくとも言論機関でありたい、思い上がりかもしれないが、そんな意識をみんな持っていたんじゃないか、あの頃は」

最後は 井沢慶一さん。井沢さんは陸軍中野学校で敗戦を迎え、四六年中日新聞入社。五〇年中部日本放送（CBC）が設立されると出向を命じられ本社ビルの四階屋上、伝書鳩の鳩舎でした。「証言」ではまず、終戦直後から始まった名古屋商工会議所による商業放送開設運動について詳しく語ります。長い運動の熱意が実を結び五一年四月の免許ではコールサインJOARを獲得、理想の放送局実現を目指します。例えばNHKレッドページ組を経験者として中途採用したり、松内則三、和田信賢、滝沢修、杉村春子さんたちを講師に招いての新人研修、そして同年九月一日、日本初の民間放送の電波が名古屋から放送されたのです。五三年テレビ開局後も編成部長、報道部長などを歴任。営業、制作、編成、報道と民放の全てを知り尽くした井沢さんの「証言」は独特の情熱で迫ります。

「当時は東芝日曜劇場中心でした、ネットのドラマで。でもお金が足りない。だから止めよう、いやそれじゃいかん、文部省や民放連からも賞を取ってるじゃないか、名古屋だから頑張ってる。いい企画がでたらやるといふ主義と姿勢ですとやって来まして、その伝統がいまだに続いているんです」

ラジオの広場

特集 ラジオは終わらない

ラジオの現場はいま

石井彰（放送作家 会員）

この夏、民間放送連盟賞の地区審査や全国35局が加盟する地方民間放送共同制作協議会（＝火曜会）の研修会などで、多くの地方局制作者と膝をつきあわせて語り合ってきた。

率直に言ってラジオ制作の現場は元気を失うどころか、いまや荒廃しつつあるといってもいいだろう。売上げの減少と聴取率の低下によって、制作現場の人員は大幅に減らされている。その結果、多くの番組を抱えた制作者は大過なく（事故なく）放送することだけに追われ、番組を良くする（聴取者を増やす）ことへの情熱も、考える時間も失っている。いま、制作現場に一人も社員ディレクターがいないAM局は珍しくない。そのかわり、優秀かつラジオへの情熱をもった番組制作会社や契約・フリーのディレクターたちが、社員の半分は1/3以下のギャラで必死に放送を支えている。放送にとって「格差社会」は決して遠い世界の出来事ではない。まさにスタジオの中で起きている。

さらにラジオを衰退させているのがラジオ制作の経験が全くない営業出身者が制作や編成の幹部になるケースが増えたことだ。ラジオ番組作りには、なによりもラジオへの愛情と豊富な制作経験が不可欠である。

それを知らずに、ただ制作費の削減だけを推進する幹部のもとで、制作者にやる気が生まれ、結果として面白い番組が生まれるはずもない。

営業出身者はすべてダメだ、といっているのではない。むしろ制作現場に細かく口を出さずに自らの営業体験を生かして新しいスポンサーを見つけてくる、そのことで制作現場を支え、そんな人が求められている。残念ながら、このような人は少ない。

じつは今、放送されているラジオ番組をより良いものにする＝面白くすることはそれほど難しいことではない。

放送が始まれば、あとは「パーソナリティーにおまかせ」スタイルをやめることだ。いまディレクターの多くはタイムキーパー化しており、じつはなにも演出していない。ディレクターが演出する（パーソナリティーのコメントを吟味して注文をつける）だけでも番組はみるみるうちに良くなる。

そのためにはディレクターはパソコンを閉じなければならぬ。パーソナリティーとともに町を歩き、人と会い、四六時中番組について考えることが求められている。こう書くと「そんなことするほど金（月給）をもらっていません」という反論がすぐ飛んでくるだろう。いや、社員ではないディレクターのギャラを少しでも上げればすぐにラジオは元気になるはずである。

伝えたいものは何ですか？

山梨放送ラジオ局制作部

マネージャー 児玉久男（会員）

ローカルのラ・テ兼営局はテレビのデジタル放送開始に伴って経営効率の見直しを迫られ、そのしわ寄せがラジオに及ぶケースも少なくない。「制作スタッフが減らされて番組の質が保てない」「売上げ低迷が続いてラジオは先細り。将来が見えない」という声が各社の現場から聞こえてくる。テレビ開局以来の危機と指摘する人もいる。

確かにラジオを取り巻く環境は厳しい。しかしこんなときこそ底力が試される。ラジオにかかわるすべての人が原点に立ちかえってみよう。なぜラジオを始めたのか、何を目指して放送を続けてきたのかを。

その答えの一つは「伝えたくてたまらないという思い」のほずである。伝えたい内容が何であれ、その思いの強さがエネルギーとなってラジオを支えてきた。伝えたいという思いがある限りラジオは不滅であり、思いを失った瞬間にその存在は無意味なものとなる。思いが確認できたら、次は表現手法の確認。ラジオの放送は生ワイド番組が中心となるが、ここで一番大切なのはしゃべり手である。ドン上野こと上野修氏（故人 会員）の言葉を借りるまでもなく、生ワイドの成否はパーソナリティーにかかっている。必要な資質はきちんと標準語を話すことではない。思いをしっかりとリスナーの心に届ける力である。

「思い」「伝えられるしゃべり手」「感性和構成力」というキーワードからラジオに必要なものは「人間力」ということが分かる。ラジオはたった一人でも番組を成立させることができるメディアだが、それだけにその人間の力が重要となる。当たり前のことだが、果たして認識されているだろうか。

この時代を乗り切るにはラジオが少数精鋭を求められるのはやむを得ないところだ。しかしおろそかにしてはならないことは、精鋭であること。伝えたいという思いを抱いた人材を、しっかりと見極めて育てて行くことが大切であると思いたい。

F M界の異端児が二十才へ

F M N A C K 5

専務取締役 田中秋夫

私が文化放送から開局一年半のF M N A C K 5へ出向となり、編成面の仕事を始めたのは一九九〇年の五月だった。当時はF M開局ラッシュの時代でバブル最盛期の頃でもあり、多くの局は開局と同時にスポンサーが殺到するという幸運なスタートを切っていた。しかし、当時のN A C K 5はF M プームに取り残され、営業売り上げは低

迷い苦ししい展開を強いられていた。

当時のFMブームの要因はY局が導入したアメリカの編成理論「レストーク、モアミュージック」と「洋楽中心」「バイリンガルDJ」である。アメリカのラジオ局が突然、首都圏に出現したような新鮮さが若者には受けたのだ。しゃべり手は「パーソナリティー」ではなく「ミュージック・ナビゲーター」と呼ばれていた。開局した多くのFM局はその路線を踏襲していた。そしてFM局の中には「音のインテリア」に特化し、売りにする局も現れた。

しかし私は敢えてその路線を避けることにした。このブームは一時的なものであり、やがて聴取者はラジオ本来の楽しさを求めるだろうと考えたのだ。

ラジオ本来の楽しさとは「魅力的なトークと音楽の絶妙なバランス」だと思っていた。もちろん音楽も重要な要素ではあるが、魅力あるパーソナリティーのトークこそがラジオの財産である。リスナーにとってラジオのパーソナリティーはテレビの出演者よりずっと身近な存在であり、影響力をもっている存在なのだ。私がNACK5で最初に始めたのはその魅力あるパーソナリティー探しであった。幸いにもDJ界の大御所小林克也氏をはじめたくさんの才能がNACK5への出演を快諾してくれた。そして自由なトークを展開してもらったことにした。しかし、その結果NACK5は「FMらしくない」「FM界の異端児」とマイナスの評価を受けることになった。あれから十七年も経ちFM界の状況も大きく変わってきた。一時代を風靡したアメリカンスタイルのFM局は姿を消し、トークを大

切にする局が大半となった。そしてスタート当初は低迷に苦しんでいたNACK5の聴取率が徐々に上昇し、いまやF1、M1層では首都圏のトップクラスに躍進し、売上面でも絶好調が続いている。そして来年は開局二十周年を迎える。ラジオ業界全体の売上げが年々減少の傾向になり、インターネットラジオの急速な普及が予測され地上波ラジオの将来性を危ぶむ声があるが、今後も現場ラジオマンの努力で魅力ある番組作りを続けていけば地上波ラジオも生き残ることが可能だと考える。

チンドン&ラジオ考

山県昭彦(会員)

昭和二十六年の民放ラジオ発足以来ずっと現場で仕事をして来たが、三年前、憑き物の落ちた感じで敵前逃亡した。だから今のラジオについては全く知らない。しかしチンドン屋、通称チンドンのことなら多少は知っている。だからチンドンについて語ろう。

実は去る九月二日の日曜日、上野は池の端の水上音楽堂で「ちんどん博覧会」が開かれた。老生は広報係の助っ人。企画・構成・進行の裏方はすべて若手連中が引き受け、親方衆がそれぞれの秘芸を繰り出すプログラムを組んだ。結果は大当たり。二千人の聴衆が詰めかけ、ついには礼止めの盛況。とてんで老生、過去に四本のチンドン

主題の番組を作っている。山形放送の「千客万来、チンドン繁盛」から宮崎放送の「チンドン降臨」まで、間に北日本放送、山梨放送の番組も。幸いにも四本が四本とも芸術祭賞、放送文

化基金賞、民放連賞などの栄に浴したから、チンドン界へもいささか寄与したと言えるかもしれないが???

さて、このチンドンの由来だが、江戸末期に大阪千日前界隈で評判を取ったアメ売りの芸に発したともい、日清戦争終結で除隊した軍楽隊員による、楽隊広告が始まりとも言われている。

文献上の初出は昭和二年、徳川夢声のエッセー中にこんな記述があった。「近頃町中で鉦・太鼓をチンドン、チンドンと叩きながら走り回っている連中がいる。うるさくて仕方がない」と。

昭和二年といえ、日本にラジオ放送の入ってきた前後だ。第一次世界大戦が終わって、ピッツバーグのアメリカ軍需産業は壊滅的打撃を受けた。兵器作りに代わる起死回生策として登場したのがラジオ放送だった。

そしてラジオは売れた。折しも台頭して来たナチス・ドイツの動静を知りたいと、たちまち欧米各国に普及。日本でも昭和六年の満州事変を契機として、爆発的に受信台数が増えて行く。つまりラジオは、世界の危機をテコに発展した歴史をもっている。

そこへ行くときチンドンははじめだった。戦時中は不要不急の仕事とされて廃業へ。昭和天皇崩御前後の三年間は歌舞音曲停止とやらで仕事は無し。地べたに這いつくばったまま、世間の動きをじっと見ていた。昭和レトロの回帰気運もあってか今、老若チンドン結

集による二千人の大動員である。地べたに這いつくばろうともしないラジオなら、未来なんて見えるもんかと、チンドンのしたたかさを目の当たりにして、ふと、そう思う。

抄遊交

まだ読売テ紙の余白に必ず口ケ先でレビの「木曜つくった俳句を寄せる。ゴールデンゴールドラム」枠が存続の穴。映画「愛の流刑地」封切りまじかの手紙。性と死にみる激情の紙。性と死にみる激情の紙。性と死にみる激情の紙。

鶴さん(鶴橋康夫監督)から来る新作ドラマの便り。「できれば部屋を暗くして見させてください」と、常に追い書きが添えられていた。

俳句の先口

羊 業界で鶴さんの戯れ句が話題となり、放送界OBの集まり「放送人の会」も刺激されてか、句会(世話人・西川章)を発足させ、赤坂の蕎麦屋で恥をかいている……。今野勉、堀川とんこ、大山勝美、石橋冠といった一人、「映像をた面々が、『定年や賞取読む』ことを期待する光り男もタダの人」でもあつと影と陰に乱れ、酔い、るまいと、五七五で苦吟惑う人間模様。まさに「映の昨今である。(まつお像言語)」の劇だ。その鶴さん、毛筆の手(ニスト)

☆ 会員になりませんか?

秋深かし隣はたれぞ放送人 硬派、軟派入り乱れる器量人の集まりです。入会を歓迎いたします。

(日本経済新聞7/27付朝刊)

会員名簿 07・10・1 現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石橋冠 磯野恭子 磯村健
 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩
 井上良介 岩澤敏 岩下恒夫
 (う) 上田千秋 碓井広義
 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰
 (え) 江口展之 遠藤利男
 遠藤ふき子 遠藤雅充
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大野木直之 大西康司 大西文一郎
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 小河原正己 沖野瞭 荻野慶人
 小田久栄門 (か) 加賀美幸子
 各務孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 川口健一 川口幹夫 川竹和夫
 川平朝清 河邑厚徳 河村正一
 (き) 岸田功 北川泰三 北川信
 北出晃 北村美憲 北村充史
 木村栄文 木村成忠
 (く) 楠美昌 工藤英博
 隈部紀生
- (こ) 小池勝次郎 河野尚行
 児玉久男 児玉孝光 後藤和晃
 小中陽太郎 小南武朗 近藤晋
 今野勉 (さ) 斎藤伸久 斎藤秀夫
 斎明寺以玖子 酒井美樹男
 寒河江正 坂元良江 桜井均
 桜井元雄 佐々木欽三 佐々木彰
 佐藤秀山 佐藤年 佐藤利明
 沢口真生 澤田隆治 沢田隆三
 (し) 重延浩 重村一 静永純一
 嶋田親一 清水満 下重暁子
 城菊子
 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎
 杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
 須磨章 せんぼんよしこ
 (そ) 曾根英二 (た) 高島秀之
 高橋一郎 高橋啓 滝大作
 武谷雅博 田澤正稔 田中昭男
 田原英二 田原茂行
 (ち) 千葉勉
 (つ) 露木茂 鶴橋康夫
 (と) 土居原作郎 戸田桂太
 外崎宏司 富永卓二 土門正夫
 堂本暁子
 (な) 中崎清栄 中澤忠正
 中島僚 中田美知子 中谷英世
 長沼士朗 中村敦夫 中村克史
 中村季恵 中村耕治 中村美美子
 中山和記 難波秀哉
- (に) 西川章 新村もとを
 西ヶ谷秀夫 丹羽美之
 (の) 野崎茂 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋本潔 林健嗣
 林裕史 原由美子 原田庸之助
 (ひ) 備前島文夫 久野浩平
 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子
 藤田晋也 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松尾羊一 松平定知
 松前洋一 松本明 松本修
 松本国昭
 (み) 三上義智 水上毅 水野憲一
 満島保夫 三村景一 三村千鶴
 宮川鏡一 三宅恭次 宮脇巖雄
 明神正
 (む) 村上光一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 村田亨
 (も) 守分寿男 諸橋毅一
 (や) 八木康夫 矢島良彰
 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保
 山崎裕 山路家子 山田良明
 山田尚 大和定次 山根基世
 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪
 横山英治 吉澤保 吉永春子
 吉村直樹 吉村光夫
 (わ) 和田智允 渡辺紘史

編集後記

和風化細雨
 桜花吐艶迎朋友
 冬去春来早

温家宝首相の漢俳だ。漢俳は伝統的な五言絶句と違い、きらびやかな形容を排し、俳句の簡潔さに影響され中国では近年盛んだと聞く。右の漢俳はこの四月訪日の際、歓迎会の席上、首相が即興で詠んだもの。もちろん返詩のしきたりがある。サア、返詩は。とつさのことで日本側は慌てた。「日本の俳句にも返句の伝統がありますが、安倍首相はお忙しいことと思ひ」と買ってでたのが同席の辻井喬。「陽光満街路/和平偉友来春風/誰阻情信愛」としたためたという。この温家宝首相の故郷が天津市。前回のフォーラムは江沢民主席の出身地揚州市のテレビ局があつた。中国がいかにメディアを重視しているか、底流に北京オリンピックを意識しているか、その意味合いが奈辺にあるのかはともかく、日韓ともに地元局天津電台を挙げて大歓迎のもてなしを受けた。心から感謝したい。さて、来年は日本の番。「福岡大会」の「返句」がおもいやられるが、それはそれ、スタンスの差異はあれ共有するもの作りの原点に立ち返り放送現場中心のニッポン・マターで臨みたいものである。放送人の会、放送批評懇談会、ならびに参加された各局や新聞人の皆様、ご苦労さまでした。(松)

BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No. 33
2007.10.5

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一



第7回 日韓中TV制作者フォーラム レセプション風景



ゲスト 女優 小林綾子さん



各国会場出席者たち